

学位論文題名

1860年代後半のロシア帝国における オストゼイ問題の浮上と隠蔽

－バルト・ドイツ人批判とロシア・ナショナリズムの相関関係に関する考察

学位論文内容の要旨

序章では、ユーリー・サマーリンという19世紀ロシアのスラブ派の論客に焦点を当てながら、バルト・ドイツ人問題(オストゼイ問題)がロシアの帝国思想やロシア・ナショナリズムとどのような関係にあったかを明らかにすると目的が設定される。その上で、バルト・ドイツ人に関する日本語、露語、英語、独語で展開された史学史が網羅的に紹介され、著者が使用した文書館が紹介され、さらに研究対象時期特定の根拠が明らかにされる。

第1章が問題の前史であり、ドイツ東方植民からポーランド支配、スウェーデン支配、北方戦争、エカチェリーナ2世の改革の試みから19世紀前半の土地なし農奴解放に至るまでのバルト海東岸部の歴史が簡略に紹介される。スウェーデン支配下で行われた農奴の待遇改善や貴族特権の制限政策が、ピョートル1世がバルト・ドイツ人を切り崩す過程で反故にされたこと、エカチェリーナ2世の同様の改革の試みが息子のパーヴェル1世によって反故にされたこと、ナポレオン戦争後のバルト地方における土地なし農奴解放がプロレタリア化する農民の待遇を一層悪化させ、これがオストゼイ問題の社会的な背景となったことが論じられる。

第2章は、サマーリンがロシアの論客としては初めてオストゼイ問題を告発した『リガからの手紙』をめぐる顛末が分析される。まず、サマーリンの伝記が紹介され、サマーラ県(ヴォルガ中流域)で農奴解放に関与した一時期を除けば、バルト地方と西部諸県(ポーランド人貴族が優勢な地域)を行き来しており、経歴上、ポーランド人問題とバルト・ドイツ人問題とをあわせて論ずる立場にあった思想家であったことが明らかにされる。

続いて、1940年代初頭以降、ゴローヴィン・リガ総督下でラトヴィア人、エストニア人農民が、待遇の改善を期待してルター派から正教へ大量改宗したことが『リガからの手紙』執筆の背景にあったことが論じられる。ゴローヴィン総督は農民に同情的であったが、1848年革命の前夜、彼は解任され、バルト・ドイツ人を擁護するスヴォーロフがこれに代わる。このような状況下で書かれた『リガからの手紙』は、そもそもドイツ東方植民以前のバルト沿岸地帯は(キエフ)ルーシの影響下にあり正教が普及していたというスラブ派に共通の歴史認識を示す。農民に対する残酷な支配、ロシア人を排除する閉鎖的な身分制自治、

バルト・ドイツ人の文書偽造癖など、スラブ派がバルト・ドイツ人を非難するに当たってその後の紋切り型となる諸論点を紹介しつつ、本論文は、サマーリンがバルト・ドイツ人を民族としてのドイツ人ではなく、ロシア帝国に寄生して中世的特権を守ってもらっている「根無し草」であるとみなしていた点に注目する。山本氏によれば、これは1860年代初頭に至るまでのロシア側の論者の共通の認識であったが、1860年代に入ると、ヨーロッパにおけるドイツ統一運動への警戒心とあいまって、「捏造された敵性民族」というバルト・ドイツ人イメージへと変わったとされる。

ヨーロッパが革命情勢にあるもとの、大ロシア人と並んでロシア帝国のいわば共同統治者であったバルト・ドイツ人と、大ロシア人との仲違いさせかねず、またバルト・ドイツ人最前線であるということでロシア政府への不信感を煽るサマーリンの著作は許容されるものではなく、サマーリンは逮捕され、ニコライ1世に直接説諭される。この説諭の生々しい内容も本論文はアーカイヴ史料に基づいて明らかにしている。

第3章は、大改革、検閲の緩和、第2次ポーランド蜂起などがオストゼイ問題を再浮上させた事情を説明する。「陰謀」や「国家内国家」などの中傷言辞や謀略文書が社会心理に及ぼした効果の分析を通じて、山本氏は、1868年に『ロシアの辺境』を国外出版したときのサマーリンが穏健なスラブ派思想家としての彼の本来の姿の延長線上では理解することができないことを指摘する。総じて、この章では、第2次ポーランド蜂起の結果としてロシアの論壇を席卷した「陰謀」論が、ツァーリ体制に対して忠実であったバルト・ドイツ人にも拡大適用されるに至った経緯が明らかにされる。その印象の強さゆえにポーランド人問題が、ロシアのエリートが帝国の他の民族問題を解釈するにあたっても援用するマトリクスとなったとの指摘は研究史につとに存在するが、バルト・ドイツ人についてこれを実証したことが、本論文の大きな貢献のひとつである。

第4章は、『ロシアの辺境』およびバルト・ドイツ人のそれへの反論書であったカール・シレンの『サマーリン氏へのリフランドの返答』の内容を紹介した後、ロシアのエリートの中でバルト・ドイツ人に同情していた「貴族党」の見解を紹介する。結果的には、対立の激化を恐れ、またクリミア体制打破に向けてプロイセン・ドイツとの協調を追求したロシア政府の規制により、オストゼイ問題は隠蔽された。この隠蔽が容易だったのは、ロシアとバルト地方の双方が、近代ナショナリズムにつながりかねないサマーリンやシレンの主張を支える社会的な基盤を欠いていたためであると山本氏は結論している。

学位論文審査の要旨

主査 教授 松里公孝
副査 教授 望月哲男
副査 教授 山本文彦
副査 教授 竹中浩 (大阪大学大学院・
法学研究科)

学位論文題名

1860年代後半のロシア帝国における オストゼイ問題の浮上と隠蔽

ーバルト・ドイツ人批判とロシア・ナショナリズムの相関関係に関する考察

この学位論文は、平成21年11月30日に提出された。同12月7日に審査委員会が発足し、平成22年2月5日の文学研究科教授会での報告に至るまでに計5回の会議が行われた。平成22年1月18日には口頭試問が行われた。

本論文は、中世のドイツ東方植民（北方十字軍）に起源を持つバルト・ドイツ人の特権的な地位をめぐって、ロシア帝国の論壇で交わされた一連の議論（オストゼイ問題）とその歴史的・思想的な背景を、19世紀中葉に焦点を当てて解明している。とりわけオストゼイ問題に深いかかわりを持ったユーリー・サマーリンという19世紀ロシアのスラブ派の論客に焦点を当て、この問題がロシアの帝国思想やロシア・ナショナリズムとどのような関係にあったかという観点から分析に取り組んでいる。

分析のための素材として、出版された資料のほかに、ロシア国立図書館手稿部（モスクワ）、ロシア古法文書館（モスクワ）、ロシア国民図書館手稿部（サンクトペテルブルク）、ラトヴィア国家歴史文書館（リガ）、エストニア国家歴史文書館（タルトゥー）など、オストゼイ問題に関連する代表的な文書館の史料が利用されている。

過去15年来隆盛しているロシア帝国史研究にあって、オストゼイ問題は最も遅れた研究分野のひとつとなっている。これは日本だけでなく、英語圏、ロシア語圏に共通した弱点である。本論文の第一の意義は、日本においてオストゼイ問題を初めて本格的に論じたところにある。

本論文は、オストゼイ問題に特化するのではなく、ポーランド人問題との関連でバルト・ドイツ人問題を論ずることによって、「反逆的なポーランド人ならまだしも、ロシア皇帝と

政府に忠誠を尽くし、軍や治安機関に大量の人材を供給していたバルト・ドイツ人までもが危険視されるようになったのは何故か」という研究史上の謎に対して、説得力ある回答を行っている。またこの回答の中で「ポーランド反乱の中でロシア・ナショナリズムが高揚したからだ」といった従来の単純な説明を退けている。

さらに、本論文は、サマーリンやスラブ派の主張の内容だけではなく、発表の形態、言辞、自説を印象付けるための手練手管などの副次的ファクターも含めた分析を通じて、公論、論壇、マス・ジャーナリズムが成立しつつあった19世紀中葉のロシア社会の言説空間の特徴を描き出している。歴史的な経緯の解明においても、山本氏は前述のようなアーカイブの一次資料を用いて関係者の生の声を前景化することにより、この問題の社会心理的な様相の描写に成功している。

国民形成において「敵」のイメージが果たす役割は、近年の西欧・東欧史研究において注目されているテーマであるが、本論文は、伝統的な思想史とコミュニケーション史の方法を結合することにより、この史学史一般の課題にも貢献しうるものである。

ただし個性的な分析がなされている反面で、伝統的な社会経済史や政治史への目配りに若干の荒さが見られ、大改革などロシア帝国史の一般状況におけるオストゼイ問題の位置づけにおいては、物足りないところがある。また、思想家のテキストを受動的に紹介する叙述が随所に見られる点や、「民族」、「国民」、「帝国」といった用語の定義が不十分な点も観察される。このような点につき口頭試問の際にただしたところ、山本氏は、これら不十分点については十分自覚しており、将来の取り組みでそれらを克服する意欲を示した。審査委員会としては、上記の若干の不十分点は、本論文の学問的な価値を損なうものではないと判断した。

以上のような審査を総括した結果、本審査委員会は、申請論文が博士（学術）の学位を授与されるにふさわしい水準に達していると認定した。